

# 敦煌本「韓朋賦」と「語り」の時空

和田和子

## 一、はじめに

「韓朋賦」は、敦煌から発見された、およそ二千字余りからなる一篇の物語作品である。<sup>①</sup>「賦」と題しているのは、それが語り聴かせるために作られた、ある特定の形式と内容を伴った文体であることを示している。中国側の研究では、この「韓朋賦」を含め「燕子賦」や「晏子賦」を含めた「賦」と称する作品群を、その通俗的な内容面から特徴づけて、「俗賦」と呼んでいる。<sup>②</sup>「韓朋賦」は、互いへの愛に殉じて死んだ一組の夫婦と、その周辺に起こった不可思議な出来事とを描いた物語であり、その内容は極めて通俗的である。そのためか、このテクストはどの図書目録の記録にも残されていない。

一方、この「韓朋賦」が、わが国の『仮名本曾我物語』（以下、〈仮名本〉と略記）に登場する、一人の遊女の語りの中に再現されていたことが既に明らかにされている。<sup>③</sup>そもそも『曾我物語』とは、国内を遊行する瞽女たちによって伝えられた口承のテクストに由来するという。「韓朋賦」もまた、遠い昔から語り継がれてきた韓朋夫婦の伝説に由来する物語である。この重層をなす語りの中に、「韓朋賦」は位置している。

中国本土で滅んだ「韓朋賦」は、いつ頃、どのようにして日本に伝わったのか。〈仮名本〉もまた、民間に伝わる曾我兄弟の伝承を軸とした通俗的な読み物であり、漢籍などを由来とする多くの説話が雑多に挿入された内容となっ

ている。このような性格からしても、〈仮名本〉における漢文資料の引用の起源を探ることは、極めて困難であると言える。しかし「韓朋賦」の物語が、言語の相違を超えて、また時空を超えて一人の女性の語りの中に立ち現れたことは紛れもない事実である。いま、この事実に即してのみ考えるならば、異なる地点において同じ物語が共有されるには何らかの理由・条件があるはずであり、それらについて考えることもまた、「韓朋賦」の理解とともに、物語論や説話論という方法から中国の資料を検討し直すという意義も生まれると考えられる。

ここで本稿が問題とする「語り」の定義を示しておきたい。まず、「韓朋賦」や『曾我物語』の伝承には、それを語る職能者の存在が推測される。しかし、語り手である彼らの語り（口演・口承）に先立つのは、「言い伝え」「昔話」も含めた、不特定の人々による無数の「語り」の存在であり、本稿が問題とするのは、このような特定の場面・状況を離れた、「語り」そのものについてである。

哲学者・坂部恵<sup>①</sup>によれば、「語り」とは、それを伝える共同体の古い「記憶」が反映されたものであるという。「韓朋賦」であれば、人々の間に昔から伝わっていた韓朋夫婦の伝説や、そこに表象される様々な事柄が、この「記憶」に相当するだろう。「記憶」とはまた、それを共有する共同体の、共通の古層の意識と言い換えてもよく、また古層の意識であるがゆえに、果てしない奥行きを持つ。「語り」とは、このような古層の意識にかかわる「記憶」を、そのつど言葉によって形象し、そこに新たな価値と意味とを付与して伝承することに他ならない。

「語り」と「記憶」との不断の往来こそが、「語り」の世界を重層化してゆくと考えるならば、残されている伝承を頼りに「語り」の痕跡を見、その深層にある共同体の意識にまで思考の対象を広げることまた、物語研究のあり方に一つの意義をもたらすだろう。今回は、現存する韓朋説話のテキストから、「語り」（口承テキストまたはそれに基づく文献テキスト）の系統の存在を指摘し、それが「語り」であると認められる条件について考えてみたい。さらにその過程において、物語を伝え、享受する人々の古層の意識について検討したい。それは「物語論」という方法から、中国に古くから伝わる昔話を新たに捉えなおすという試みでもある。

## 二、韓朋説話の拡がり

「韓朋賦」の下地になっているのは、その時点で既に遙か昔の伝説であつた韓朋夫婦の伝説（以下、韓朋説話と略記）である。ここではまず、さまざまな形で伝承される韓朋説話の、その時間的な奥行きと、空間的な拡がりについて確認しておきたい。

韓朋説話の淵源は古い。戦国・宋の国を舞台とするこの説話について、魏の曹丕の撰とされる『列異伝』に既にその簡略な記述が見えるが、それを更に遡る古い資料が発見された。敦煌の西北・馬圈湾の遺跡から出土した前漢時代の木簡資料である。また、浙江省杭州市から出土した画像鏡に加え、山東省嘉祥県から出土した画像石（いずれも後漢時代）に描かれているのもこの説話であるという新たな報告がある。これらの資料は、東晋の干宝が著した『搜神記』に見える「韓憑」夫婦（『搜神記』では「朋」を「憑」に作る）の「相思樹」伝説よりも更に三〇〇年前後も遡るもので、唐代の「韓朋賦」の書写に至るまでに相当の歳月が流れていたことになる。

韓朋説話の伝播も広範囲にわたる。『搜神記』では、これを戦国時代の宋の都であつた睢陽（宋国の首都。河南省商丘市の南）の「韓憑城」に伝わる怪異譚としていた。北魏の酈道元撰『水経注』にも河南の「淮水」に韓朋伝説に関連した古跡・青陵台があると記す。明代以降に編まれた『風雅逸篇』（楊慎撰）などの歌謡集や『大明一統志』（李賢等撰）などの地理志でも、「封丘県」（河南省封丘県）に伝わる故事としている。つまり韓朋夫婦の故事は、河南省東部がその発祥の地だったのだろう。一方、唐代末期に奇聞異事を集めた『嶺表録異』（劉恂撰）には、「韓朋鳥」の記事があり、海南省・江西省の辺りにまでこの故事が伝播していたことが分かる。

いずれにしても、漢代の遺跡から発見されたいくつかの新資料によって、この説話が、従来予想されていた時期よりも早い段階で、かつ広域の範囲に伝播していたことが明らかとなった。そして、時代が下るとともに、言語の相違をも超えて、さらに拡がっていったものと考えられる。

この説話の拡がりは、単に物理的な時間や空間の拡がりだけではなく、他系統の説話との交差や干渉を含めたバリエーションの拡がりでもあった。例えば、相愛の仲を引き裂かれて死んだ夫婦が、一体化した樹木と化すというこの説話の重要な部分は、漢代の古楽府「孔雀東南飛」にある焦仲卿夫婦の物語に既に見えるものである。また、「韓朋賦」で韓朋の妻が夫に贈った手紙の言葉は、『搜神記』の別の説話にも見える。夫が長城建設の苦役で死に、その妻が慟哭して長城を崩したという所謂「孟姜女」伝説にも、「韓朋賦」と共通する要素がある。

韓朋説話のバリエーションについては、澤田瑞穂『中国の傳承と説話』（研文出版 一九八八年）に詳しく、死んだ夫婦・男女が胡蝶や虹に化生する例など、周辺の少数民族に伝わる民話も含めて幅広い紹介と考証とがなされている。多くの説話がそうであるように、韓朋説話もまた、それ自体にいくつかのバリエーションがあり、それがさらに他の説話と交差・干渉して、さらに様々な形へと変化したと考えられる。「韓朋賦」の語りは、そのような韓朋説話の伝承を踏まえつつ、時に「通俗作家」の手によって「再編改作され」（澤田前掲書五五頁）ながら、絶えざる変容・変遷を重ねて拡がっていったのだろう。その語りの表現形態が、話本・演劇・小説と姿を変えていったのも、その拡がり方の一つとして捉えなければならない。

### 三、韓朋説話の系統―文献資料について

次に、文献資料によって伝えられる韓朋説話をそれぞれ比較すると、その内容的特徴から、少なくとも三種の系統に分類できることが分かる。そして、この三種の系統がその特徴を備えたまま、日本へと伝えられていた。このことを、以下の系統図から説明し、「韓朋賦」の奥行きと拡がりについて更なる検討を加えたい。

#### A 『搜神記』系

（晋）干宝『搜神記』（『法苑珠林』など各類書における伝写と、それらの日本への伝来も含む）―（鎌倉前期）聖覚『言泉集』―（江戸前期）林道春『怪談物語』―浅井了意『新語園』―契沖『万葉代匠記』―木下台定『桑

華蒙求』

B 「韓朋賦」系

敦煌漢簡—「韓朋賦」—(唐) S. 五四七一『注千字文』—(唐) 段公路『北戸録』に引く崔龜図注『無名詩集』

—(室町) 仮名本『曾我物語』—(室町) 作者不詳『女訓抄』—(江戸前期) 作者不詳『三国物語』

C 「烏鵲歌」系

(唐) S. 五四七一『注千字文』「女慕貞潔」注—(唐) 于立政『類林』「貞潔」—(宋) 楊齊賢注『分類補註李太白詩』

「白頭吟」注—(室町) 玄棟沙弥『三国伝記』—(室町) 作者不詳『揚鳴曉筆』

A の『搜神記』系とは、晋の干宝の撰とされる『搜神記』の現行二十巻本のテキストと、『法苑珠林』など各類書に引かれているテキストである。『搜神記』は「韓朋賦」の十分の一ほどの簡略な文で、およそ以下のようなプロットで構成されている。

① 宋康王の舍人「韓憑」が美しい妻「何氏」を娶ったが、宋王がそれを横取りした。憑はこれを憎んだ。

② 宋王は韓憑を辺境へやって台を築かせた。何氏は夫への想いと、自害の意志とがあることを、暗号に託して韓憑に示す。妻の気持ちを知った韓憑は自害し、妻も衣服を腐らせる細工をして台から身を投げて死んだ。

③ 王は二人を別々の場所に埋葬させるが、その墓から伸びた樹木が互いに向かつて枝を伸ばしてつながった。その樹木にはやがてつがいの鴛鴦が住み着き、悲しげに鳴いた。

④ 宋の国の人々は、その木に「相思樹」と名付けた。人々は韓憑夫婦の精魂が化したものであると考えた。この出来事を歌った歌が、今も睢陽の地に残っているという。

日本への伝来については、『日本国見在書目録』に『搜神記』の書名が記され、鎌倉前期に成立したとされる唱道資料『言泉集』には、「相思樹」全文の引用がある。もともと、韓朋伝説自体はもともと古くから伝来していたとみえ、『古事記』『日本書紀』には既にこの伝説を踏まえたと思われる記述がある。<sup>⑤</sup>

B系統にある「敦煌漢簡」は、上述のごとく、現存する韓朋説話の最も古い資料である。裴賜圭の報告（注6参照）によると、殘簡には「口書、自召榦備問之。榦備対曰、臣取婦二日三夜、去之來游、三年不口、婦口（以下欠）」と記すという。韓朋が宋国に遊仕したまま帰らないという記述は『搜神記』にはなく「韓朋賦」にある。また、同系統に引く『無名詩集』もまた、「韓朋賦」との類似性を指摘された新資料である。そして、それに続くテキストとして、わが国の『仮名本曾我物語』、『女訓抄』、『三国物語』を挙げることができる。

Cは、干宝の『搜神記』には見えず、「韓朋賦」のみに見える貞夫（韓朋の妻）の言葉（歌）が挿入されている系統である。これらを仮に「烏鵲歌」系と名付けてA・Bと別系統とした。

以下、このC系統を借りて、「韓朋賦」の物語の概要を追ってゆくことにする。この系統で最初に挙げることができるのは、敦煌文書S.五四七一『注千字文』の「女慕貞潔」の注釈部分である。

喩貞夫之事韓朋、宋王聞其（美）、聘以為妃捨賤、曰、「卿本庶人妻、今為一國母、衣即綾羅、食即咨（恣）口、何有不樂、而不歡喜」貞夫曰、「妾本辞家別親、出適韓朋、生死有定、貴賤有殊、双狐有黨、不樂神龍、魚鼈水居、不樂高堂、鴻雀有群、不樂鳳凰、庶人之妻、不樂大王。韓朋須雖賤、結髮夫婦、宋王雖喜、非妾独有。」又辞曰、「蓋聞、一馬不被二鞍、一車不串四輪、妾既一身、不事君。」乃投朋壙而死、此貞潔之志全也、斯之者、世代之所希奇、当今之時、未見也。

冒頭に「喩貞夫之事韓朋」とあるのは、「貞潔」といえば韓朋の妻「貞夫」であるという共通認識を示すものだろう。また「貞夫」という、貞潔な女性像を平易に表した呼称は、その物語が広く民間に行われていたことを予想させる。一方で「何氏」に作る『搜神記』の記述は、より「記録」としての性格が表れていると言えよう。

そしてこの注釈文は、「韓朋賦」の以下の二か所（傍線部分）に似る。

貞夫入宮、憔悴不樂、病臥不起。（宋）王曰、「卿是庶人之妻、今為一國之母、有何不樂。衣即綾羅、食即咨口。黃門侍郎、恒在左右。有何不樂、亦不歡喜。」貞夫答曰、「辞家別親、出事韓朋、生死有処、貴賤有殊。蘆葦有地、

荊棘有藜、豺狼有伴、雉兔有双、魚鱉有水、不樂高堂、燕雀群飛、不樂鳳凰。妾是庶人之妻、不樂宋王之婦。」韓朋の妻「貞夫」は、宋国へ遊仕したまま帰らぬ夫を想い、手紙を書く。それを好色の宋王が読み、貞夫に興味を持つ。王は臣下に命じて貞夫を掠め取らせ、後宮へ入れてしまう。この部分は、意に添わぬまま王の后に立てられ、憔悴した貞夫が、王妃の身分より庶人の妻でありたいと王に告げた場面である。この場面は、富貴への誘いにも決して靡くことのない、婦人の貞潔を象徴するものとして『注千字文』に採用されたのだろう。『注千字文』ではこれに続けて、貞夫が「一馬不被二鞍、一車不串四輪、妾既一身、不事君」という言葉を残して韓朋の墓穴に身を投げ、その「貞潔の志」を全うしたと記す。この部分を「韓朋賦」では以下のように記す。

貞夫下車、繞墓三匝、嗥啼悲哭、声入雲中、臨壙喚君、君亦不聞。回頭辭百官、「天能報此恩。蓋聞一馬不被二鞍、一女不事二夫。」言語未訖、遂即至室、苦酒侵衣、遂脆如葱、左攬右攬、隨手而無。

宋王は貞夫の心を自分に向けてため、若く美しい韓朋の体を損ない、「青陵台」の役夫とする。貞夫は青陵台で韓朋と対面するが、韓朋は自らの身分を恥じ、貞夫の心変わりを疑う。貞夫は夫を想う気持ちを血書に託して韓朋に射かけ、それを読んだ韓朋は自害する。貞夫は宋王に懇願して、韓朋を葬る墓を作らせる。やがて韓朋の墓へとやって来た貞夫は、上記の言葉（傍線部）を百官達に言い放ち、墓穴の奥へと身を投じるのである。

『搜神記』の記述と一致するのは、「妻」が夫に暗号文を送って自害の意志を示す場面、墓穴に身を投じても側近の者に捉えられないよう、あらかじめ衣服に細工をしておくという場面である。ところが、韓朋伝説の拡がりの過程においては、この二つの場面は抜け落ちるか、変容して伝えられていることが多い。

次に、唐・于立政『類林』（佚書。西夏文の残巻のみ存す）「貞潔篇」を挙げる。

韓朋妻美、宋康王奪之、而遣韓朋築青陵台、並欲以其妻為夫人。韓朋妻曰、「南山有鳥、北山張羅、鳥自高飛、網謂為何。」又曰、「狐狸双居、不樂龍王、魚鼈水居、不樂高堂、鷓鴣棲巢、不樂鳳凰、婦弱賤醜、不樂宋王。」尋即自殺。韓朋聞後亦自殺。宋王噴怒、令人葬屍於道辺。而後各於墓上生出樹木、枝節相連、宋人謂之相思樹。『搜

神記」載此事、是周宋時人。

ここでは、韓朋が賦役に当たったという「青陵台」という場所が明示され、「韓朋妻」による「南山有鳥、北山張羅、鳥自高飛、網謂為何」というもう一首の歌が加わっている。この歌は、「韓朋賦」では、宋国に仕えたまま帰らぬ韓朋を想い綴ったという、例の貞夫の手紙の中に出てくるものである。なお、この文の末尾に「搜神記載此事」とあるが、「青陵台」の語も貞夫の二首の歌も、現行の『搜神記』には見えない。また、同じC系統に分類できるテキストとして、南宋の楊齊賢が著した『分類補註李太白詩』（四部叢刊本、卷四「白頭吟」注）があり、そこでは、死んだ韓朋夫妻が蝶に転生したとある以外は、この『類林』とよく似た記述となっている。

宋王を拒絶し、夫への貞節の志を示したという貞夫の二首の歌は、やがて「青陵台歌」「烏鵲歌」と称され、韓朋説話を踏まえた古歌辞として、明代以降さまざまな歌謡集や地理志に採録されることとなる。このC系統のテキストは、この二首の歌と併せ、「青陵台」にまつわる韓朋説話として定型化したものと考えられる。恐らく、「韓朋賦」系の文字あるいは口承テキストから派生し、唐代から宋代にかけて確立されたものだろう。

室町時代、玄棟沙弥が撰んだという説話集『三国伝記』「宋韓憑妻事」「相思木事」の記事は、このC系統のテキストをほぼ直訳したものとなっている。いま、貞夫（『三国伝記』では「女」に作る）の歌の部分を挙げる。

康王怒テ曰ク、女御更衣ニ成ル事ハ皆女兒ノ望ム処也。汝何愚乎。時ニ、女ノ曰、「狐貉双ベル有り。神龍タラシ事ヲバ不冀。亀鼈水ニ居シテ高台ヲ不冀。鳥鵲ノ巢鳳凰ヲ不冀。庶人ノ妻宋王ヲ不冀。」

撰者が、『注千字文』あるいは『類林』などの類書系の書物から引用したことは間違いないだろう。梁の時代に制作されたという『千字文』は、七世紀には広く普及し、普及の過程で多くの注釈書が作られたが、その殆どは散逸したという。北魏から北周の末に生存した李暹の注もその一つである。小川環樹の解説（『千字文』岩波文庫一九九七年）によれば、敦煌本『法千字文』もまた、日本に辛うじて残存する李暹の注と同じ系統に属するものであるという。しかし、江戸時代に通行したという『纂土附音増広古注千字文』（『通行本』）および、弘安年間に書写さ



れた国内最古の『李暹注千字文』（上野本）について言えば、この故事は引かれていない。小川によれば、国内に残存する李暹注の系統は、二種に大別され、引かれている故事も異なるという。恐らくこの敦煌本『注千字文』は、これらの注釈類とは異なる姿を留めたものだろう。

『類林』もまた、漢語でのテキストは既に滅んでおり、上記の「貞潔篇」の資料は、西夏語で記されたテキストの残巻を手掛かりに、漢語の本文を復元したものである。また日本においても、『日本国見在書目録』にその書名を記すものの、『類林』そのものは滅び、『類林』系の類書の残巻が僅かに残るばかりである。そのため玄棟沙弥が依拠した資料が何であるかは、現時点では確認することができない。

#### 四、「韓朋賦」と「語り」の系統

##### (一) 『無名詩集』

容肇祖、裘錫圭はいずれも、干宝が民間に取材した韓朋説話と「韓朋賦」との間に、もともと大きな違いは無かっただろうと推測している（注5・注6所掲論文）。先に見たA『搜神記』系、B「韓朋賦」系、C「烏鵲歌」系の三つの系統のうち、Bの「韓朋賦」系が韓朋説話の母型に最も近く、CはBから派生したものの、AはB（もしくはその説話母体）を簡略化して記録したものであると考えてよいだろう。そしていずれの系統も、日本への伝来が確認されていることは、先の章で確認した通りである。

更に本稿では、Bの「韓朋賦」系テキストが、広く民間に行われた通俗的な「語り」の背景をより反映した系統であると指摘しておきたい。

この系統として、『北戸録』崔龜凶注に引く『無名詩集』がある。『北戸録』とは、唐の懿宗の頃に嶺南地方に赴任した文人・段公路の見聞録であり、崔龜凶もまた同時代の人物である。その「相思蔓」条下の注に言う。

『聘北道裏記』引許有韓憑冢。宋王史也。『四部目録』有『韓憑書』。敘事委悉而辭義鄙淺、不復具記。『無名詩集』

又云、「昔有賢士、姓韓名朋。故娶賢良妻。成公素之、女名曰貞夫。具賢具聖、云云。(以下略)」

韓朋説話を伝えていると思しき書名がいくつも見えるが、「韓朋賦」同様、いずれも図書目録に記されないまま佚書となったものである。『韓憑書』が「敘事委悉而辭義鄙淺」とされていることや、『無名詩集』という平易な名称は、それを享受する層が幅広く存在していたことを示していると言えよう。そして『無名詩集』の文体・内容には、敦煌本「韓朋賦」と多くの共通点がある(傍線部分)。いま、その「韓朋賦」の冒頭部分を挙げる。

昔有賢士、姓韓名朋。少小孤单、遂失〔其〕父。独養老母、謹身行孝。用身為主、意〔欲〕遠仕。憶母独注〔住〕、  
〔故娶〕賢妻。成功索女、始年十七、名曰貞夫。已賢至聖、明顯葩華、形容窈窕、天下更無。

これらが同系統のテクストであることは明らかだろう。ただ崔龜図は、上記の冒頭部分、および結末部分(後述)のみにその引用を止めている為、『無名詩集』全体の姿を知ることにはできない。

## (二) 化粧坂の遊女の語り

次に、同じB系統として、「韓朋賦」の日本的受容である(仮名本)を取り上げる。そもそも『曾我物語』は、ま  
ず曾我兄弟についての民間伝承が土台としてあり、それは瞽女のような職能者によつて語られたものであるという。  
その(仮名本)において、化粧坂の遊女・虎が「貞女両夫にまみえず」という言葉を挙げ、その言葉の由来として、  
この「韓朋賦」の物語を引いて語るのである。この場面は(仮名本)にのみあり「真名本」には見えない。また(仮  
名本)には異本が多く、かつ「真名本」よりも広く読まれていたという。これと内容が酷似し、また成立年代も同時  
期であろうと推測される物語に、『女訓抄』巻二「てい女をしのつるき羽の事」がある。これは漢籍や日本の説話から、  
女性の戒めとなるような話を並べた教訓書であり、榊原千鶴の考察によれば、これらの書物は、女性が嫁入りなどの  
際に持参する教育書の類であったという。教育・訓戒の書という意味では、貞潔の好例として「貞夫」が引かれてい  
る『注千字文』・『類林』と、趣旨を同じくするものであろう。同じ貞女の物語は、江戸時代の仮名草子『三国物語』  
へと継承されてゆく。

さて、(仮名本)は、「韓朋賦」から、その最小限の骨格だけを残し、大和言葉に改めたテキストである。その冒頭部分は次の通りである。

大国に、しそうといふ王有。かんはくといふ臣下をめしつかひ、ある時、かんはく、むすびたる文を落としたり。王御覧じて、「如何なる文ぞ」と、御たづねありければ、「はれ、宮仕暇無くて、日数ををくり、家にかへらず候ふ。ころもとなしとて、妻のもとよりくれたる文」と申す。

ここでは、韓朋・宋王がそれぞれ「かんはく」・「しそう」となっている。妻が「ころもとなし」として手紙を書いたという、「かんはく」の「しそう」に対する弁明部分は、「韓朋賦」において、貞夫が韓明に宛てて、孤独な心情を縷々と手紙に綴ったことを踏まえての記述である。しかし、(仮名本)においては、その手紙(歌)本体や、漢語の特性を生かした謎かけや謎解きの部分などが一切失われている。B系統の『三国物語』や『揚鳴曉筆』が貞夫の歌の部分直訳して「狐貉双ベル有り」としている点とは対照的である。

さて、この(仮名本)が「語り」の系統であることを確認するために、坂部が提示した物語論の方法からこの作品を見ていきたい。物語論では、言語の時制、特に過去形にかかわる時制を問題とする。語られる世界は全て、過去からやって来たものだからである。これを虎の語りに当てはめると、「非体験的過去」「間接過去」を表す助動詞「けり」の使用と、会話部分との対比によってまさにそれが「語り」であることを示している。

かんはく、やすからずにおもひけれども、かなはず。女も、王宮のすまひ、ものうくて、たゞ男の事のみ、思ひなげきければ、王、おどろきおぼしめす。時の関白りやうはくと言ふ者をめし、「此の事いかゞせん」ととひたまふ。「さらば、かれが男のかんはくを、かたわになしてみせたまへ。おもひはさめぬべし。」と申たりければ、「しかるべし」とて、耳鼻をそぎ、口をさきて見せたまふ。

会話を中心にした場面では、語り手・虎の主体が背景に退き、代わりに登場人物たちの姿が前景に浮かび上がる。助動詞「けり」の使用は、語り手が、自らの生きる現実の世界と、語られる世界との二つの次元を往来していること

を示している。それは結局、虎の語りを語る聲女などの語り手が、自らの生きる現実世界と、物語世界との二つの次元を往来していることと構造的に重なる。

一方で、時制や相（アスペクト）の無い古漢語においては、「語り」が過去の出来事にかかわる事柄であることを、何によって示すのだろうか。それは、「韓朋賦」の冒頭に「昔有賢士、姓韓名朋」とあるように、「昔」という言葉の使用に拠るところが大きいと思われる。「昔」とは、現実世界に昔語りを導入する時の一つの定型句であり、「語り」という言語行為をそれとして特徴づけるものである。坂部によれば、「語り」が関わる過去は、単なる過去一般ではなく、ある「独特の様相を帯びた過去」であり、このことを話者と聴者との間の暗黙の了解として示す記号が「昔」「むかしむかし」という言葉であるという（坂部前掲書五七―六八頁）。

そして（仮名本）と同系統の『女訓抄』もまた、同様に「むかし」という記号を用いている。しかしここでは、「はうこく」（仮名本）では「大国」の話として、具体性に欠けた、どこか遠い異国の場所の話となっている。その為、この「むかし」がいつの「むかし」なのかもはっきりしない。このことが却って、語られる世界が、日常世界とは異なる「独特の時間と存在の次元」（坂部前掲書六一頁）であることをより一層際立たせている。

これらに対して、「韓朋賦」を含めた中国での韓朋説話は、「韓憑臺」「青陵台」といった具体的な「場所」と密接に結びついた記憶として語られている場合が多い。中国においては、過去の時制を用いる代わりに、場所に繋がる遠い記憶について語ることが、そのまま過去の出来事を語るということになるのだろうか。

「語り」を時制の問題から分析する物語論の方法が、古漢語にどこまで適用できるかは、今後更に分析を加えていく必要がある。ただ、物語の時間というのは、リクルの考察（『時間と物語』久米博訳 新曜社 一九八八年）のように、「語る」という営みの中で再び生き直された時間である。そうであれば、過去の出来事である物語世界を、「いま」の時点の出来事として語るのが、漢語での「語り」の一つの特徴ではないかと推測する。

(三) 生き方の指針としての「語り」

坂部は、「語り」について、日常の世界を超出した「記憶と想像力の世界」とし、ここでは全ての形象が「なにはどうかの神話的色合」を帯びていると述べる（坂部前掲書五九頁）。この「神話的」という形容は、「語り」が、それを共有する人々の古層の意識にかかわるような、「独特の位相の過去」であるという主張によるものである。さて、この古層の意識の表れとして、特に古い共同体において顕著に見られるのが、何らかの超越的な存在（亡魂・神仏など）についての「語り」であり、その「語り」が、市井の人々に対し、自身の日常世界をどう生きるかという指針を与えるものとして働いていたことを改めて指摘しておきたい。

「韓朋賦」の末尾では、韓朋夫婦が鴛鴦に転生し、その抜け落ちた羽が刃となって宋王を殺したといい、最後に因果応報の教訓を述べ、物語を締めくくる。

變成双鴛鴦、拳翅高飛、還我本郷。唯有一毛羽、甚好端正。宋王得之、（遂）即磨芬（抃）其身、大好光彩、唯有項上未好、即將磨抃項上、其頭即落。生奪庶人之妻、枉殺賢良。未至三年、宋国滅亡。梁伯父子、配在辺疆。行善獲福、行惡得殃。

『無名詩集』では、鴛鴦の羽が、韓朋の恨みを晴らす刀であるという「空中」の「言」で締めくくる。

鴛鴦同心異体、頭白身黄、（中略）一毛落地（中略）。驟往献于宋王。宋王将抃其□□□□□□【欠六字】、（中略）唯有項上少許無光、将毛重抃致其殺傷。空中有言曰、「不是鴛鴦舞媚毛、此是韓朋報冤刀。」

鴛鴦の羽が刀となり宋王の首を斬るという記述は、現存の漢籍ではこの二つの資料にしか見えない。一方、日本の資料では、〈仮名本〉、『女訓抄』は勿論、江戸前期の連歌の辞書『匠材集』などの資料にも、「をしのつるき羽」が宋王の首を切り落としたと記しており、鴛鴦の報復伝説の受容と定着とを窺わせる。韓明伝説の伝承に際し、中国においては、「相思樹」伝説にまつわる場所を伝えることに比重が置かれ、日本においては「つるき羽」による報復を伝えることに比重が置かれていたのかも知れない。しかしいずれも、超越的な存在（因果の法則も含む）が引き起こし

た不可思議な出来事として語られ、それが人間のあるべき方向性（貞潔、勸善懲惡など）と関連付けられているという大きな共通点がある。「語り」が、たとえ想像の上でも、別様に生き直す可能性を人に開くものであれば、そこには目指すべき理想が提示される必要があるだろう。「韓朋賦」が、『注千字文』『類林』『女訓抄』で婦徳を語るものとして引用されているのを既に見たが、同じ理想を広く語る上で、聞き手の関心を更に引き寄せ、更にその語りに説得力を与えるような超越的な存在が、自然に提示されたのだろう。「韓朋賦」は、このような「語り」の世界を背景にして生まれた、極めて通俗的な文学作品として評価できるのである。

## 五、おわりに

中国であれ、日本であれ、それぞれの共同体の古い記憶の形象として「語り」があり、それは伝承の過程で、また新たな「語り」を生む。人々は日常世界の比喩的な投影であるような登場人物たちの言葉に耳を傾け、また超越的な存在のもとに、自らの生き方の指針を見出してゆく。この指針を生み出す基盤となるのも「語り」である。典型的な悪逆非道の人間が天の報いを受けて滅び、貞潔の徳を貫いた男女が転生して結ばれる。「因果応報」や「貞潔」のような訓えが、社会や人の生に対する解釈の仕方を定め、日常の生活や行動の場において、そのあるべき方向性を示してゆく。このような「語り」というものの特質を、「韓朋賦」を通じて十分に見出し得るのである。

さて、化粧坂の遊女は、遠い大国の貞女の物語を引き合いに出し、さだかー「貞か」「定か」ならざる身を恥じて仏門に身を投じることを決意する。

物語を聴き、それをまた説き語り、あるべき心の在り方を定めること。それは、世のうつろいの中に絶えず放擲され、翻弄される人々に与えられた、ただ一つの救済の法であったのかも知れない。

【注】

- (1) 「韓朋賦」の鈔本は五点ある。状況は次の通り。①S.二五六三 首尾元(書き止まり)、存五四行、首題「韓朋賦一首」②P.二九二二 首尾全、存八六行、首題「口賦一首」、尾題「韓朋口口卷」③S.三三二七 首全尾欠、存三五行、首題「韓朋賦一首」④P.三八二三 首欠尾全、存七一、尾題「韓朋賦一首」⑤S.四九〇一・三九〇四・二〇九一(三点は同一抄本) 首尾欠、存五七行。
- (2) 程毅中「関于变文的幾点探索」(『文学遺産増刊』第五輯 中華書局一九六三年)において初めてこの概念が提示された(伏俊璉「敦煌俗賦の文学史意義」『敦煌文学文獻叢稿』中華書局二〇〇四年)。
- (3) 早川光三郎「変文に繋がる日本所伝中国説話」(『東京支那学報』第六号 一九六〇年)・渡瀬敦子「仮名本『曾我物語』巻五「貞女が事」の典拠——「韓朋賦」をめぐる——」早稲田大学教育学部学術研究 第五六号 二〇〇八年)に、「韓朋賦」の日本文学における受容と展開が指摘されている。
- (4) 『かたり』(弘文堂 一九九〇年)。坂部は、ポール・リクール、ヤコブソンを始めとする物語論の先駆的研究を踏まえ、「時間」「記憶」という観点から、「語り」の性格を基礎づける。併せて、「語り」と密接に関わる「時制」の問題について、ハラルト・ヴァインリヒ(『時制論—文字テクストの分析』脇坂豊他訳一九八二年 紀伊国屋書店 原著初版 一九六四年)や藤井貞和(『物語文学成立史』一九八七年 東京大学出版会)の業績を踏まえた詳細な考察を行っている。
- (5) 容肇祖「敦煌本『韓朋賦』考」(周紹良・白化文編『敦煌変文論文集』明文書局 一九三五年)、王国良「韓憑夫婦故事源流考」(『六朝志怪小説考論』文史哲出版社 一九八八年)に詳細な考察がある。
- (6) 裘錫圭「漢簡中所見韓朋故事的新資料」(『復旦学報』第三期 一九九九年)
- (7) 王牧「東漢貞夫画像鏡鑑賞」(『收藏家』二〇〇六年)、姜生「韓憑故事考」(『安徽史学』第三期 二〇一五年)、森下昌司「漢代の説話画」(『国立歴史民俗博物館』第一九四集 二〇一五年)
- (8) 呉王夫差の娘紫玉と、その恋人韓重との悲恋を伝える説話。二十卷本『搜神記』巻十六に見える。

- (9) つかまえられぬよう衣を破れ易く細工し、自害を遂行するサホヒメ(『古事記』「垂仁天皇記」)、梁の庾信の詩を踏まえ、鴛鴦を夫婦に擬して詠んだ野中河原史満の歌(『日本書紀』「孝徳天皇記」)の例。
- (10) 陶敏・陶紅雨『北戸録』崔龜岡注所引『韓朋賦』残文考論(『文史』第四期 二〇〇五年)
- (11) 『三国伝記』玄棟撰 池上洵一校注(三弥井書店 一九七六一一九八二年)
- (12) 王国良前掲論文に引く陳麗卿(『韓憑故事研究』文化大学修士論文 一九八七年)の漢訳を用いた。
- (13) 榊原千鶴『女訓書の研究』(二〇〇〇年 科学研究費補助金〔基盤研究C〕研究成果報告書)
- (14) 『曾我物語』市古貞次・大島建彦校注(日本古典文学大系八八 岩波書店 一九六六年)
- (付記) 本稿は平成二六年度科学研究費補助金(基盤研究C)「日中説話比較に向けての敦煌文献説話研究」課題番号：二六三七〇四〇四)による研究成果の一部である。